

大好きな大槌だから、 ここで復興します。



「一般社団法人おらが大槌夢広場」は、地域の復興を掲げて大槌町内の商店主や水産加工業者などによって組織された団体である。11月に一般社団法人となり、同月、被災者が中心となって「おらが大槌復興食堂」を町内にオープンした。代表は阿部敬一さん。活動には20数人が参加している。



被災地で復興支援に取り組むNPO等の活動を紹介します。

一般社団法人 おらが大槌夢広場 (大槌町)

Revival spirit **復興**
スピリット
第2回



小川 淳也さん

復興食堂は新しい町づくり

住宅会社を退職して参加した小川淳也さんは、「一点で動くよりも、大槌全体を巻き込んで線で動くことで復興が動く。」と考え、団体の活動に参加した。

復興食堂は、「笑顔をつくらう」というテーマで始めたと言う。食堂は、ボランティアの人に地元のもの食べて笑顔になってもらえる場となっている。

また、震災で職を失った人たちの働く場にもなっており、働く人たちの笑顔が見られる。「ここは、町の中の人も外から来てくれる人も潤う場所です。」と小川さんの表情は明るい。

おらが大槌夢広場では今後、内陸部に泊まっているボランティアの人が、大槌に泊まってもらえるように、受け入れ態勢を作ろうと考えている。民家でのホームステイや、学校の施設を使つての宿泊施設など、行政と話し合いながら考えているところだ。

また、「大槌の土産は何か。」とボランティアの人にも尋ねられるため、全国に発信できるようなお土産の商品開発もしたいと構想はふくらむ。「今なら、首都圏での知名度も上げられるので、チャンスだと思えます。町はシャッター街だったところもあったので、町を元に戻すというのではなく、新しい町づくりと考えて進んで行きたいです。その第一歩として、この食堂が始まったんです。」小川さんは熱意を示す。

私の活動体験記

下玉利元一さん
(いわて三陸復興食堂)

第2回



出会いの場が町のパワーを生む

下玉利元一さんは、岩手県出身のアーティスト松本哲也さんとともに、震災前の人と人の交流を復活させる「場」を再生しようと、復興イベント「いわて三陸復興食堂」を4月11日から始めた。被災地での炊き出しや盛岡・東京などでコンサートを行い、被災地と支援地の人と人の交流を図っている。「おらが大槌復興食堂」設立のきっかけともなった。

「盛岡で飲食店を経営していましたが、震災直後にそれを譲って、炊き出しや物資の搬入などのボランティアに参加していました。歌手の松本哲也さんと一緒に沿岸を回って支援活動をしていて思ったことがあります。それは、被災して避難している大勢の方々が、笑うこともできない、泣くことも